## 編集後記

今年も，10 月 13〜14 日に，I-LISS の第 6 回の大会がインドの National Institute of Technology Warangal, Telangana で行われます。I-LISS Japan からは, 志保田務・大城善盛・前川和子・中村恵信・藤間真各氏による “An Analysis of S. R. Ranganathan’s Influence upon Librarianship in Japan” がオンラインで発表されます。

ただ，私も事情が十分には分かっていないのですが，今年は第 5 回の I-LISS の大会も行われます。2020 年には大会は行われておらず，おそらくこれを埋めるためだと考えられます。第 5 回大会は，第 6 回大会の後，10 月 21〜22 日に韓国・大邱の国立慶北大学校で行われます。こちらでは現地で，志保田務・孫誌衒・山田美雪各氏による “A Study on Acceptance and adaption of S. R. Ranganathan’ theory in Japan” が発表される予定です。

今号の大城氏による資料は，編集委員会としてはまずは研究ノートとしての掲載を考え，査読のプロセスを進めました。ただ，その後，著者から「査読意見に対する修正は困難で，別の種類で掲載したい」との申し出があり，資料として掲載しています。(編集後記のこの部分も，私としては査読プロセスを公開することは本意ではありませんが，著者の意向によるものです。)

結果的に，今号には論文も研究ノートも掲載されていませんが，そのほうが論文誌としての価値を高めることにつながるのではと考えています。

前号の編集後記に，定年退職された日本史の同僚の先生が「芸亭は仏教書が中心であった」との意の論文を書かれていた，と引用なく書きましたが，山本幸男『奈良朝仏教史攷』法藏館, 2015 に収録されている「第 10 章・石上宅嗣と『維摩経』– 仏教，老荘思想との交渉 – 」です。

あらためて，「日本では図書館と呼べるものが奈良時代にすでにあった」と思いたくなる図書館関係者は多いでしょう。最近話題の，高山正也『図書館の日本文化史』筑摩書房, 2022 にも「この芸亭こそ我が国の書籍の公共圏を具現化した最初の事例 (p.38)」とあります。ただ，私も含めて，高山氏とは異なる歴史認識を持つ人も，芸亭は “図書館” だと認識していた人は多いはずです。

学会の役割として，人を育てることは大切だと考えています。今までこの学会は，主に研究大会を開くことと学会誌を出すことに取り組んできました。ただ，この学会が中心的に活動している近畿圏に図書館情報学の大学院がない現状において，もう少し別の取り組みもできるのではないかと考えています。何をすると決まっているわけではありませんので，アイディアを寄せて頂ければと考えています。ただ，育てる側/育てられる側と分かれているものではなく，私も含めて皆で成長できるようなものにしたいと思っています。

(編集次長 岡田大輔)